



前回の政策特集「言葉より心により添う認知症」に対して22人の市民の皆さんから意見をいただきました。代表的なものをご紹介します。

(1) 仮にあなた自身や家族が認知症になった場合、どのような支援があると安心できると思いますか？

- デイサービスやショートステイの施設より、介護度に関わらずもっと気軽に行けるような場所を地域に作ってもらえると人とのつながりや自分の居場所を得られると思う。(御幸ヶ原町・20代)
- 徘徊などをする人を周囲の人たちが見守る体制があれば、特に年配の人たちの見守りする体制があればもっと安心できると思う。(清原台・70代)
- 認知症の人の話しを聞いてくれるボランティアなどの支援があると良いと思う。(大寛2丁目・70代)
- 身近なところに相談できる人や場所があると安心できる。地域包括支援センターは何でも相談できるし、さまざまな福祉に関することも教えてもらっていて大変助かっている。(山本2丁目・60代)
- 認知症の本人も家族もホッとできる場がたくさんあれば良いと思う。(横山1丁目・60代)

(2) 「認知症の本人やその家族にやさしいまち」にするために必要なことは何だと思えますか？

- 介護に関わっている人もそうでない人も、認知症の人への対応を学ぶ機会を作り、少しでも関心をもってもらえるような取り組み。(御幸ヶ原町・20代)
- 困っている人に一言声を掛けることが自然に当たり前のことになっていくこと。(御幸ヶ原町・20代)
- 元気な高齢者の人たちの手を借りて、認知症の本人やその家族を支援する仕組み。(平松本町・60代)
- 将来を担う子ども達が大人になった時に「やさしさ」と「思いやり」の心を持てるような福祉教育が必要。(桜1丁目・70代)
- 認知症に対する理解を持って、みんなが手を引き、支え合い、声を掛けてくれるそんな優しい町にできたらいいと思う。(横山1丁目・60代)

広報うつのみやの政策特集は、皆さんと一緒に考えていただきたいテーマを取り上げ、年4回編集します。

前回の政策特集「言葉より心により添う認知症」の概要



言葉より 心により添う認知症

尊厳を持って最後まで自分らしくありたい。これは誰もが望むことですが、この願いをはばみ、深刻な問題になっているのが認知症です。本人はもちろん、支える家族も大きな不安を抱えながら生活しています。親しい人が認知症を患ったときに、私たちは何ができるでしょうか。

本格的な高齢社会を迎え、患者数が増え続けている現在、市では、認知症になっても安心して暮らせるまちを目指し、認知症に対する正しい知識の普及・啓発活動として「認知症サポーター養成講座」や「家族介護教室」の開催に取り組んでいます。

また、認知症になっても、住み慣れた家庭や地域で、安心して暮らすことができるよう、医療・介護・福祉が連携したケア体制の充実が求められています。

みなさんも、認知症の人やその家族が住みなれた地域で安心して穏やかな気持ちで生活し続けるために、どのようなサポートができるのか考えてみて下さい。



料金受取人私郵便



3 2 0 8 7 4 0

差出有効期間
平成26年8月
15日まで
【切手不要】

(受取人)
宇都宮市旭1丁目1番5号

(宇都宮市役所)
宇都宮市総合政策部広報広聴課
行



3 2 0 8 7 4 0

3

氏名	住所	
年齢	歳	職業

差し支えがなければ記入してください。広報紙で意見を紹介する際には、氏名の記載はしません。なお、はがきの情報については、目的以外には使用しません。